

露伴全集

第三十八卷

露伴全集

第三十八卷

昭和二十九年九月十六日 第一刷發行
昭和五十四年十一月十九日 第二刷發行

露伴全集 第三十八卷

定價 二千三百圓

著作權者

幸 田 文 ©

編 纂

蝸 牛 會

發行者

綠 川 亨

發行所

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

電話 〇三二六四二二
振替 東京六二六四〇

目次

六十日記第一	明治四十三年六月	一
六十日記第二	明治四十四年一月	二一
六十日記第三	明治四十四年二月	四三
六十日記第四	明治四十四年六月	九一
六十日記第五	明治四十四年八月	一一七
六十日記第六	明治四十四年十月	一三九
六十日記第七	明治四十四年十二月	二一九
六十日記第八	明治四十五年四月	二五九
六十日記第九	大正二年四月	二七七

劍崎沖の風 大正三年四月

三〇五

六十日記第十 大正三年九月

三一七

六十日記第十一 大正三年十二月

三三五

六十日記第十二 大正五年四月

三四三

後記

三六三

六十日記第一

甲子 明治四十三年六月二十八日 牧野望東來訪。婢もとを小石川御宅へつかはす。母上來り居たまへるをもて御留守の爲、且は當人退身支度の閑を得させんが爲也。帝國劇場株式會社長より七月二日帝國ホテルに招待の狀至る。堀内文麿方へ其子の病狀見舞の端書をおくる。角田竹冷古俳書蒐刊の企あるよし望東談也。就而は註釋を要する場合相談がたきとなりくれとのこと、おほよそ之を諾す。詳しくきは猶皆定まらざる也。大島貞吉來訪、予の病を問ひくれたる也。

乙丑 二十九日 昨夜十時頃一郎を睡りつかせんとて抱寐なせる中とろ／＼と夢に入りて覺むれば恰も十一時也。子供等の心をなぐさむるよすがにもと一昨夜牛乳屋の手より貰ひたりし小狗、今宵もまた啼くこと甚しく、既に一ト寐入りしたる事なればまた睡ること能はず、其の聲耳に冴え胷に沁み、これもまた母を慕ひなげくかと悲しくもおぼえて、蚊帳を出で戸棚をさぐり手に當りたるカル、ス煎餅など持ち行き頭を摩でやりて歸れば、一郎は夢心地に身じろぎして小さな手を吾がふところにさし入れ乳房いづくとかきさぐりなんです。五月雨の夜のいと靜かに蚊屋越しの燈の光弱々と照らす

下に、三人の子の罪無き寐顔、彼方の端にそがひにやすみおはす母上の霜白き御ぐしを見る。おのづとわが胸も雲におほはるゝ心地す。二時といふにまた起き出でゝ狗に物くれ一郎にしとさす。三時過ぐる頃狗の聲を聞き／＼やうやく睡る。今朝さむれば既に六時を過ぎたり。昨夜十一時の地震より空模様變りしにや日ざし美はしく雲翳絶えたり。されど鼻つまり頭重くて吾が心は鈍く暗し。

越中齋藤八郎より書狀を得。八郎よろづ物足りながら猶自らなさけなき男といふ。よりてこれを諷して返書をおくる。

米光龜二郎子供百日咳のよし昨日大島よりきけるまゝ見舞狀をいだす。

高はし省三來る。漢口の事情を語る。火にあひて家財蕩盡せるよし、まことに氣の毒の至り也。されど例によりて取り締なき奇人なれば、釣道具などを予より貰ひて數日中倍遊すべき約をよるこび歸る。慾深きごとくして心淡くまことに一風の奇人也。肆を萬里の異域に開きて經營まさに完からんとするに際し、一朝祝融にあひて忽然として志業灰となる、易に所謂巢を焚かるゝの禽となつてしかも健翮なほ衰へず、海を渡り郷に歸つておもむろに再學を畫す。孟獲の勇か杜子春の意氣か、然して此時に當つて長江小艇一二日を釣魚の悠々消せんとす。殆ど常人の爲にあらざるに似たり。これこの人の窮して通じ通じて窮し運命の雲變水流して竟に定まらざる所以乎。

丙寅 三十日 昨夜もまた狗の爲になやまさる。婢みよは其の枕近く頻りに狗の啼くにかゝはらず快げに睡り居り、予は數室を隔つるにかゝはらず眠に入り難し。一嚟を發せざる能はず。乃ち入定。

夜半より風冷え曉より雨を催し七時より降る。一日陰霽常なし。午後米光龜次郎倉本清太郎來る。例によりて米光雜話おほし。子の百日咳幼はあしく長はよき由也。母上あや子を伴ひて小石川へもどり玉ふ。

丁卯 七月一日 狗また啼くこと甚し。午前三時起出でゝ鎖をはなちやりけるに曉になりて起出で見れば姿なし。あたりを尋ねまはり午前十一時やうやくこれを前隣萩原氏の裏庭に得たり。

一郎下痢腹痛を訴ふ。ピスミット劑を與へ懷爐をいだしめ、抱寐して被中に在らしむ。十一時輕快、起出づ。

讀賣新聞記者中谷徳太郎來る。東京付近景色の談をなす。

堀内新泉來る。數日中佛像を持來りて買はせんといふ。鷹見勝友人を伴なひて來る。其の人所有の土地購買をすゝめに也。ことわりてかへす。石井研堂高橋省三に河畔にあふ。兩人を新利根におくる。予は都合ありて同遊せねばなり。夜二時覺めて復睡るあたはず、數々一郎の體溫を候ふ。幸に事無きを得たり。

戊辰 二日 一郎體溫は三十七度ほどなれど猶便通數々也。おくに太郎を伴なひて来る。見舞の爲也。おもと來り、自分荷物を少々持ちて小石川へ歸る。お久來る。母上文子をつれて來玉ふ。文子大腸カタルとおぼし。薄暮母上は歸り玉ふ。演劇株式會社の招宴に臨む。澁澤大倉末松林諸氏おもなる人々也。歸れば十時過ぎたり。

文子便通數度、血を見る。體溫三十八度半。聊か氣づかはし。お久看護しくる。嘉納氏より使者あり、文章添削の爲也。

己巳 三日 一郎いよ／＼よし。文子昨夜より今曉へかけ便通十四度、體溫は前三時より三十七度五分に降りたれど容體侮りがたければ、長田國手を訪ひて狀をのべ藥を受け歸る。石井氏來訪。昨日金町より上陸、高橋氏と共に歸れるよし、一尾を獲る能はずといふ。おもと母上御使として来る。文子見舞になり。午後文子熱さめ容體善變す。三時長田氏來診、三兒皆よろしき方との事、胸膈一時に去るのおもひあり。久藏歸れる由。夜歌子發熱嘔吐す。お久齒痛になやむ。

庚午 四日 歌子幸に事なし。今朝は學校をやすましめ臥床に在らしむ。文子一郎皆よろしき方也。

文子にはおも湯少とを興ふ。お久齒痛よろしと也。數日來心勞甚だおほくわが身もまた健ならねばひそかに疲憊をおぼえしが、今朝やうやく心おちつきて机に對ひ業を執るを得たり。

おくら來る。母上よりの御見舞也。書を裁し狀を報じて恩を謝し奉る。午後おもとをかへす。母上御腰痛のよしなれば也。

辛未 五日 三兒皆よろしき方也。歌子學校へ行き度由切望につき其の意に任す。しかるに出でんとするに及びてまた自ら已む。身の猶心にまかせぬところあればなるべし。乃ち家に在りて保養せしむ。堀内新泉來る。印度佛二軀を持來る。佛壇本尊としては似合はしからぬをもて折角ながらことわりて返す。同人養母を迎へに駿州へ今日出立するよし、母に孝なる悦ぶべし。

久藏來り、三日命を用ゐずして縦に歸れるいひわけをす。石井高橋二人の上を語る。高橋の狀眼に見るがごとく、其の訥辯の談にそゞろに打興ず。

木下つるや婆來り、忤久藏さる酒造家の娘の他へ縁づけるものを伴ひて朝鮮へ欠落なせるよしを語る。長次郎は既に老いて半身不隨也、久藏妹きくは未婚也、婆は腰も既に曲らんとせる也。日比は雷聲颯笑して蠻氣人を壓するの婆も流石に女なれば、打濕りて物語るさまいとあはれ也。されど其の聲猶數室に徹して下婢等皆其の談を聞く。所謂坂東猛者の猛者聲こゝに其の系を残せるかとをかし。

長田氏婿來診。文子大によろし。

八

壬申 六日 今日は歌子を學校へ行かしむ。母上御見舞狀を成友宛にさし出す。

荒才三郎來る。白瀬中尉南極探檢につき報效義會の取るべき態度を如何にすべきといふ事にて也。應分助言助勢を與ふべき旨を答ふ。梯子縁談につき傳言を托し嫂の意を問ふ。

文子いよ／＼よし。母上よろしき旨成友より返書を得たり。

癸酉 七日 昨夜更くるまで久子とこの後の吾が家のことを語らふ。結局一周忌までは久子面倒を見てくるゝことに決す。

太陽編輯員某、成功社員某來る。中西屋谷富藏昨日來る、忠臣藏上るり句解大槻饗庭鈴木諸氏に叶はぬをもつて也。

郡司嫂上來る。梯子縁談の爲也。

母上來玉ふ。夜政吉方へ行きたまふ。

甲戌 八日 母上來たまふ。兒等の衣服の御世話などの爲なり。御老眼のおぼつかなく剪刀手にして、

ほときものなどお久を相手に爲したまふ狀、傍より見て恐縮のほかなし。午後はまた歌子の髪を洗ひやりたまふ。御まめくしさはさることながら後にて御腰など痛みはせぬかと氣づかはる。

原亮五郎來る。大學も休業となりたれば大島の瓦斯會社へ見學に通ふと也。

母上とまりたまふ。

乙亥 九日 お久歸る。十二日また來るべき約也。共に淺草にて佛像を購ふ。

富山房杉谷代水に途にてあふ。名著文庫の件につき予をたづねたる也。同書五冊ぶり校訂の約をなす。

嘉納氏より使者あり。

母上今日もとまりたまふ。

丙子 十日 昨夜呼び置きたれば婢おもとの弟夙く來る。もと身の上の事を諭しやる。

政吉來る。正覺寺への附届を托す。

安藤老人お清お雪お節來る。盆禮に也。お清よく肉づき肥えたり。おとろへはてたりし昨年に比して人の命ほどわからぬは無しとつくくおもふ。

氣分あしき事甚しく夜按摩を招く。次郎例の如く劇談し人を笑はしむ。

丁丑 十一日 小石川よりおもと來る。母上御命令により御使になり。おもとを安藤、築地、青山、須崎諸家へ盆禮にまはらしむ。

伊藤吉太郎來る。絮談不斷夜に入り、共に前川に行き猶談話をつゞく。英米人氣質等につき得るところ多し。

築地嫂上見ゆ。盆禮になり。

山川智應病氣見舞に來りくる。

水島佐久良盆禮に來る。

嘉納治五郎柳田國男より書簡あり。

もとを小石川へかへす。

戊寅 十二日 廣業畫譜を落手す。

嘉納柳田へ返書を出す。

三兒ほとんど快し。

母上小石川へ御歸り也。

足立北鷗來る。讀賣新聞社に小説を九月一日より掲げ得るやう囑す。辭するを得ずして之を諾す。内々腹案の酒客傳を書かんとする也。

雨やうやく晴れ氣溫大に加はる。

邦子太郎をつれ來り、佛前に供物などなしくる。樋口邦子より書簡あり、且佛前に供物をなしくる。久子來らず。夜食の副食ごしらへなど手づからす。婢みよ風呂をたきて夜に入りて辛く沸きしが、歌子は既にねむがりて臥床に入るなど、よろづいぶせく物悲し。夕ぐれ蚊やりを爲さざりければ蚊聲かしましく、室の内取亂されて時計はとまり火は消え居り、佛燈を點ぜんとすれば油無く、子等はたゞ譯も無く騒ぎ遊ぶなど、暮近き頃聊か吾が事に耽りてそれ／＼のさしづを怠り居たりし爲よろづ埒無くなりたる、淺ましく口惜かりき。婢は心あしからねど齡若く思疎ければ、霖雨にて濕りたる風呂がまに火をたきわづらひて、そのみに時を費したればなるべきにや。一浴の後は萎頓して睡る。

己卯 十三日 文子のほかは休藥せしむ。

久子來る。魂まつりよろづと／＼のへくる。

礫川堂へ産の祝物をおくり玉祭供物の禮をいふべく、おもとを小石川よりつかはす。

堀内新泉來る。盆禮になり。

伊東と亞堂、倉本清太郎來る。前同斷。

本郷龍岡町聚精堂編輯局員徳光哀城來る。青年文藝に文を寄せむことを囑す。

夜に入り萩原の孩兒死亡、通夜の鐘の音物悲しく睡る能はず。

庚辰 十四日 成友來る。卜部來る。高橋省三來る。神谷妻病氣よろしき由、卜部の談也。

讀賣新聞社より使あり。

田村奈良吉來る。

田村松魚來る。

石井研堂來る。西田氏の事を頼む。

もと小石川より來る。

萩原葬禮。

辛巳 十五日 また雨。頭重く氣色わろし。

もと小石川へかへる。